

祖なるを以て、爰に其の傳略を記載す。

○靈劔實刀傳話

抑、上古以來、刀劔の靈異は世人の知る處にして、そが中にも靈劔の第一は尾張國熱田宮に鎮座し給へる草薙劔なり。尾張風土記に、昔日本武尊命、巡歷東國邊時、娶尾張連等遠祖宮酢媛命、宿於其家。夜頭向廁、以隨身劔、掛於桑木遺之。入殿乃驚、更往取之。劔有光如神、不抱得之。即謂宮酢姫曰、此劔神氣、宜奉齋之爲吾形影、因以立社。とあり。是熱田神宮の濫觴なり。太平記劔卷にも、今の熱田大明神是也とあり。禁秘御抄に、御劔者、神代有三劔其一也。子細雖多不能注。また大刀契、匡房記に、顯實云、鋒劔三尺、或二尺。摠十。其中一劔脊在銘。北斗左、青龍右、白虎其外不見。是自百濟所被渡之二劔之一歟云々。と載せ給へり。また壹切、代々東宮寶物也。ともありて、是等上古以來朝廷の靈劔なりと。武家にて源氏重代の靈劔鬼切、鬼丸の靈驗の事は、太平記劔卷に委く記載せり。本阿彌家の傳書に、鬼丸は國綱粟田口にて打ちたり。豐臣秀吉公より、本阿彌光徳へ預けられしより以來、本阿彌家代々預りける

靈劔なり。また鬼切は童子丸とも呼べり。安綱打ちたり。松平越後家に傳來すと。又足利家重代の靈劔二つ銘、鬼丸、大傳太をば天下三振の實刀ともいへり。中にも二つ銘は山城國愛宕山に納れり。大傳太は豐臣秀吉公より前田家へ傳へたり。于今前田家にて、傳太の太刀、小鍛冶の長刀とて、天下第一の靈劔なりといひ傳へたり。此の外古來名作多しといへども、靈劔、實刀は鍛冶の作品に拘らず、靈異いぢるきものなりといへり。さて、後々まで靈作と稱するは、豐後の行平、筑後の三池、山城の達磨、奥州の實壽、出羽の月山、薩摩の波平、筑前の金剛兵衛、以上七作は靈異いぢるく、化生の物甚だ恐るといへり。按するに、七作の中にも行平が事は、元文元年に撰びたる下學集に、鬼神太夫刀工也。始云紀新太夫。名乘行平。作刀時、鬼神出來助。故世俗呼鬼神太夫也。時代多或説とあり。太田道謙の能登路記に、能登國鳳至郡劔地村の古傳話を記載す。其の傳説に云ふ。往古何方の者とも知らず。若き男來りて入部と成る。能く刀劔を鍛へたり。しかし此の者、その鍛ふる所を堅く禁じて人に見せず。妻不思議に思ひ、或時透間より覗

き見れば、鬼形と成り、口より火焰を吹きかけ、鐵を延ばせり。妻いたく驚きつるを見て、其まゝあまた鍛へたる劔共を携へ走出で、海上をさして走行きけり。妻わかれをしたひしに、筐にや一振の劔を投げ與へけり。其の銘に鬼神大王波平行安とあり。残りの劔を投込みし處也とて、七、岩のふごとく、甚だ深き海あり。又鬼の窟とて、大なる岩窟あり。其屋敷跡は西の清兵衛といふ者の家也。此家の井戸は則ちその時よりの井戸なり。故に此水にて穢れたる物を洗へば、必ず祟ありと云ふ。又此家にて産する事ならず。今此劔地村に製造する鐵針かねも、元は此家より傳法せしものにて、劔地の名も是より始れりと、古來いひ傳へたり。とあり。按するに、右の傳説は今も邑人傳聞して、老少口實とすれど、波平行安が事は證とするに足らず。下學集に載せたる鬼神太夫行平が傳説をば傳へ誤りたるものなるべし。波平行安は薩摩の鍛冶也。源平盛衰記卷三十七に、越中前司盛俊が刀は、薩摩國住人浪平造の一物也とあり。是も靈劔七作の一刀なり。又越中國婦負郡若ヶ嶋村といふ村落に、松倉と稱する枝村ありて、家三戸許あるの

み。此の地に鍛冶屋敷と呼びて五十歩許の畑地あり。夫れより少し山手に三拾歩許の地あり。仕事場の遺跡也といひ傳へたり。此の地に少しく清水流る。其の邊に墓松とて、稀なる大樹ありしかど、先年伐取りたるよし。此の松は則ち鍛冶の墓驗也といへり。右鍛冶の姓は松目、名は市兵衛と稱し、そのかみ當時の名人なりしかど若死せしと。在世中數多の刀劔を打ちたりといへども、銘を切たるは僅に四五腰に不過よし。其の刀劔甚だ靈異なりしかど、實名は傳承せずと。或は云ふ。郷義弘ならんと。今按するに、義弘は新川郡加積郷松倉に居住すと云ふ。婦負郡若ヶ嶋村なる松倉の鍛冶は別人なるべし。加賀國には、さる靈異いぢるき刀劔を打ちたる鍛冶古來居たる事傳承なければ、能登、越中の古傳説をば記載して、刀劔鍛冶の考據とはなしたり。おもふに、加賀國にての鍛冶共の中に、世に傳聞の事あるは、鶴來の一鐵のみなるべし。

○鍛冶屋敷

舊藩國初以來、刀鍛冶等の居邸をば安江の村地にて賜はり、町名をば鍛冶町と呼べり。金城深秘録に、城中普請鍛